

普遍的なシャクティ グルマーイについての話 バースデーブリス(誕生日の至福)を祝って

グルマーイの話 1 ヴァニ・アグラワル

2001年、私と夫のガネーシュはボストンに住んでいました。6年間も赤ちゃんが欲しいと試みていました。いろいろな治療法を試しましたが、何も成果がありませんでした。それは深い挫折感と疲労に満ちた時期でした。ついに私たちは、すべてをやめよう決めました。「もしそのようなことが起こったら、それは素晴らしい。そうでなかったら、それでも構わない」と、自分たちに言い聞かせました。つまり、私たちは諦めたのです。

すべての治療をやめた3、4カ月後に、夢を見ました。夢の中で、私がシュリー・ムクターナンダ・アーシュラムのアヌグラハの下のロビーに立っていると、グルマーイが上のロビーから歩いてきて、私の前に立ち止まりました。そして、私をじっと見詰めると、手で私のお腹をさすってこう言うのです。「私が神様からもらってきて、あなたにあげましょう」

私が目覚めると、グルマーイの言葉が耳に反響していました。この夢は本当であったかのように、目を開いてからも一つ一つの詳細まで思い出すことができました。

そしてその通り、この体験のすぐ後で、何と私は娘のアルピータを妊娠しました。医師がこのニュースを確認した後、ガネーシュと私はセーヴァーをささげるために、

シュリー・ムクターナンダ・アーシュラムを訪れました。私たちはこの嬉しいニュースを、グルマーイと分かち合う機会を期待していました。私たちは、まだ誰にも話していませんでした。

アーシュラムに到着すると、アヌグラハの下のロビーに入りました。そこでグルマーイを見ました。夢で見たのとそっくり、グルマーイは上のロビーから私たちの方へ歩いてきました。グルマーイは私の目の前に止まると、私が何も言えないでいるうちに、私のおなかをさすって言いました。「そこに何か入っていますか？」
私がうなずくと、グルマーイは笑ってそのまま歩いていきました。

何週間か後に、私はまたアーシュラムを訪問しました。この訪問の時にもまた、グルマーイとのダルシヤンを持つ大きな幸運を与えられました。

ダルシヤンの時に、グルマーイと私の妊娠について話しました。そして会話は別の話題に変わりました。ダルシヤンが終わってグルマーイがその場を去る時に、振り向いて言いました。「तुम रोज़ श्रीगुरुगीता और श्रीरुद्रम का पाठ करना, बच्चे को उनसे लाभ मिलेगा।」「『シュリー・グル・ギター』と『シュリー・ルドラム』を毎日朗唱しなさい。それは赤ちゃんのためになるでしょう」
私はこの導きを受け取って、とても幸せで感謝しました。

その日以来、妊娠している間中、私は「シュリー・グル・ギター」と「シュリー・ルドラム」を毎日朗唱しました。

出産が近くなり、私は少し気分が悪くなり始めました。夫は私を病院に連れて行きました。それは6月2日の夜でした。医師が診察すると、私は感染していて熱もあ

ると言いました。彼女は抗生物質を点滴し、アルピータの鼓動をモニターするために、私を機械につなぎました。アルピータの鼓動はとても速くなっていて、医師は、これは赤ちゃんがストレスを感じていることを示すものだと心配していました。医師は抗生物質が効き始めたら、赤ちゃんも落ち着くでしょうと、期待を込めて言いました。

しかし、数時間がたってもアルピータの鼓動は速く、その時点で医師は赤ちゃんの生命を危険から救うために、帝王切開をすると決めました。

医師は 20 分以内に、手術に向けて、私の準備をすると言いました。私と夫はかなり心配していました。医師が手術の準備をするのを待つ間に、「シュリー・グル・ギター」と「シュリー・ルドラム」の録音を同時にかけて決めました。マントラが始まるや否や、アルピータの鼓動はゆっくりとなり、そして本当に驚いたことに、20 分もすると彼女の鼓動は完全に正常になりました。医師たちはとても驚いていました。

翌朝、私は自然分娩(ぶんべん)でアルピータを出産しました。

グルマーイは、ガネーシュと私にこの極めて貴重な神からの贈り物を与えてくれました。そしてグルマーイは、それを実行することによって私たちの人生に贈り物が授かるという命令を私に与えました。そしてそれは満たされました。

グルマーイ、ありがとうございます。心の底からありがとうございます。

グルマーイの話 2 クシャマー・フェラー

1991年の春に、グルマーイはオーストラリアで「教えの旅」のツアーをしていました。私はシュリー・ムクターナンダ・アーシュラムで執筆者および編集者としてセーヴァーをささげながら、ツアーの支援をしていました。ある日セーヴァイトが、オーストラリアから時を急ぐ課題について電話をしてきました。私は即座にその課題に集中し、それを完了すると同時にオーストラリアに返送しました。しばらくしてから、私はバガヴァーン・ニッティヤーナンダ・テンプルに行って瞑想しました。

私がバデ・バーバのテンプルに一人で座っていると、突然に内なるビジョンが大きく開いて、私のスシュムナーの黄金の柱が見えました。輝かしいクンダリニー・シャクティの光が、私の中央の柱の心臓の領域のすぐ上にある新しいレベルに、上昇したのが見えました。徐々にその光は、この入り口から昇り続けていくのだろう、と私は感じました。このビジョンは戸口のかんぬきを外すような、驚くべき内なる音を伴っていました。

この光を見て、この音を聞いて、私は激しく揺すぶられて熟睡から呼び起こされたように感じました。「今、私は夢から起こされたのだ。『悪い』夢だ」と、そして、「私の人生の夢から目覚めたのだ」と、考えたのを覚えています。

私の人生はそれほど「悪く」はありませんでした。でもその瞬間、私の意識は不完全な暗さに慣れてしまっていたことに気づきました。私は深く追及してこなかった、

多くの否定感と疑問を持って生きてきました。しかし今、私の意識の光がより輝き、より楽観と信頼がある領域に上昇したのを見たのです。

私は、グルマーイの恩恵とシッダ・ヨーガの道の教え、そして、長年にわたって私を暗闇から光へと導いてくれたグルマーイへの感謝の念でいっぱいになりました。私の運命にとって、この瞬間は意義深いものであると感じました。

翌日の朝早く、オーストラリアのセーヴァイトが再び電話をかけてきました。彼女は言いました。「グルマーイはあなたが送ったものに満足しています。そして、グルマーイはあなたにそれを伝えるようにと私に言いました」

「私がグルマーイにこの課題を持っていくと、彼女はあなたに即座に電話をして、感謝するように言いました。でも、オフィスに戻るとシュリー・ムクターナンダ・アーシュラムは既に真夜中だと気づいたので、あなたを起こしてはいけないと控えていたのです」

「その日、後でまた、グルマーイに会うと、彼女が最初に言った言葉は、『クシャマーに電話をして伝えましたか？』というものでした」

「私は、『まだです、グルマーイ、向こうは真夜中だったもので』と言いました」

「グルマーイは、言いました。『でもあなたにすぐ電話をしなさいと言ったでしょう。彼女は電話をもらったら、さぞ嬉しかったでしょうに。ことによったら、彼女は悪夢を見ているところで、グルから電話で起こされたら、どんなに幸せだったかもしれません。真夜中に私からの言葉を聞けたら、彼女はどんなに嬉しかったことでしょう』」

今日に至ってもなお、私がグルとの一体感に恍惚(こうこつ)となったあの思い出には、驚きで息をのみます。グルマーイの直覚、意図、応答は、至高なる意識の振動と何ら異なるものではありません。マインドと感覚だけでは知ることができない事柄を、グルマーイが知っていて対応する何千、何百万という実例を、それ以外にどうやって説明できるでしょうか。

そしてグルマーイ、あなたは完全に正しいです。私はあなたからの電話をいつでも、どこにいても「常に」嬉しく受け取るでしょう。

グルマーイの話 3 バーナデット・マーフィー

これからしようとする話は、私が SYDA ファウンデーションでスタッフとして働き始めてから7年後、1995年2月の寒さの厳しい夜に起こりました。私はシュリー・ムクターナダ・アーシュラムの居室にいました。満ちていく月は空高く、外では風が吹き荒れ、ヒューヒューと鳴り騒いでいました。

私はマインドに引っ掛かっていたある事柄について、グルマーイに尋ねたいと思っていましたが、的確な言葉を全くもって見つけることができませんでした。私はいつも日記を熱心につけていたので、ベッドの横の床に座ると、数カ月前にグルマーイから頂いた日記帳に、グルマーイ宛ての手紙を書きました。

私が書いていると、グルマーイの存在を強く感じ始めました。私は恩恵によって明晰(めいせき)な状態に駆り立てられているように感じ、思考は落ち着き、手紙の最後の言葉がペンから流れ出ると、私の心から静けさと決意が湧いてきました。

私が書き終わる頃には、グルマーイとのつながりがとても深く、そして明白に感じられ、それはあたかも彼女が私の部屋のすぐそこにいるようでした。私は彼女に会って、ただありがとうと言いたいと切実に思いました。

ある考えが湧きました。「グルマーイが廊下を歩いてくる。私はそれを感じる。彼女は来るに違いない！」と。すると、私の理性が戻ってきました。「火曜日の夜 8 時。夢を見ているのね。今までグルマーイはあなたの部屋を訪ねたことはないし、今夜この時間に訪れるもっともな理由は無いでしょう」

しかし、グルマーイの存在はあまりにも強く、どうしてもドアから外をのぞかないではいられませんでした。ほんのちょっとだけ、何の差し障りもないでしょう？そして戸口に行くと、そっとドアを引いて開けました。

グルマーイは廊下にいただけではなく、何と私のドアの真ん前にいて、彼女の手はドアの取っ手を握っていたのです！

驚きと喜びで、私は言いました。「グルマーイ、こんばんは！」

グルマーイは尋ねました。「どうして分かったのですか？ 私がここにいると感じたのですか？」

私は言いました。「ええ、そうです、グルマーイ！ あなたの存在がすごく強く感じられたのです」

グルマーイは私の部屋に入ると、私のプージャーの傍らに立って、部屋の窓から月を見ながら言いました。「ここから月がよく見えますね。ここは良い感じがしますよ」

私はグルマーイに感謝して言いました。「私は今、あなたへの手紙を日記に書いていました。そして、マインドの平穏さと明晰(めいせき)さを感じていることを、感謝したいと思っていたのです」

グルマーイは目を輝かせ、「良いですね！」と言って、帰ろうと振り返りました。おやすみなさい、と互いに言いながら、私は絶対的な静けさ、感謝の念、畏敬の念を感じていたことを覚えています。

それから22年が過ぎました。そしていまだに、あの晩グルマーイが私にくださったもの、つまり知識、そして、グルと弟子は心の中では常に一つであるという体験の贈り物を感じることができます。

グルマーイの話 4
スワーム・インディラーナンダ

1985年、私はオークランドのシッダ・ヨーガ・アーシュラムを訪れました。それは私の初めての訪問で、サツァングやコースで話をするセーヴァーをしていました。

ある日、オークランドに滞在してからしばらくすると、グルマーイに会いたいという深い切望が湧いてきました。その時グルマーイは、ニューヨーク市でサツァングやシャクティパート・インテンシヴを行っていました。私は、「グルマーイは、私がここにいるのを知っているのかしら？」と考えていたことを覚えています。悲しみが心に湧き上がってきました。「私がここにいるのをあなたが知っていて、私と一緒にいるということを明らかに示してください」と、グルマーイに心から祈ったのを覚えています。

私が祈った途端、より幸福な気持ちになり始めました。このうきうきとした幸福感は、自分の部屋を掃除し始めた時にも感じていました。そして、ちょうど私が床を掃いていると、電話が鳴りました。私が電話を取ると、電話交換台で働くセーヴァイトが、興奮して叫んでいました。

ようやく彼女が言っていることを理解すると、このようなことを言っていました。「グルマーイがあなたに電話をかけてきています。つなぎましょうか？」

ためらいなく私は言いました。「もちろんです！ つないでください！！」

カチッと音がすると、深くて柔らかい優しい声が聞こえました。「インディラーナンダ、どうしてですか？」

「元気です、グルマーイ！」と、私は上ずった甲高い声で答えました。そして私は一息つき、より低い声で言いました。「元気です、グルマーイ！ とても素晴らしいです！ 最高です！」

それから、私たちはおしゃべりをしました。グルマーイはオークランドのシッダ・ヨーガ・アーシュラムについて尋ね、ニューヨーク市でのサツァングについての話をしました。

とうとう、グルマーイはダウンタウンの会場に行く車の中にいて、もうすぐ到着するため、間もなく電話を切らなくてはならないと言いました。

私たちはさようならと言いつつ、まさに電話が切れようとした時に、グルマーイがおどけた調子で言いました。「どうしてもっとたびたび、私に電話をかけてこないのですか？」

そして、カチッという音が聞こえました。

午後の間中、どうして「もっとたびたび」電話をかけてこないのか、というグルマーイの言葉の意味を考えていました。私は不思議に思いました。なぜなら、私がグルマーイに電話をかけたことはなかったからです。グルマーイが、かけてきたのです！

その晩、私がサツァングでこの体験を分かち合った時に、ホールにいた全員が一斉にはっと息をのんだその時、私はグルマーイの言葉を本当に「理解」しました。そして私は、私のサーダナー全体に影響を及ぼすような貴重な教えを学びました。

グルマーイはいつでも私たちと共にあります。心から呼び掛ければ、グルマーイにはそれが分かるのです。



© 2017 SYDA Foundation. 著作権所有。